

## 第六章 倭玉篇

## 1 總 說

倭玉篇とは我が國にて作られたる、玉篇をその藍本とせるものゝ稱なり。

倭玉篇の著録せられたる最初の物は假名玉篇とあること既に緒言に述べたり。其の著録より五十年の後なる長享三年の奥書ある者に始めて和玉篇の名は存しぬ。此の尊き一帙は法學博士中田薫氏の藏たりしが、大正癸亥の震災に烏有に歸したり。之に次ぐ古寫本として今日は大永四年(又五十年)の物を數ふれども、其は玉篇要略集と稱せられて倭玉篇とは云はず。されど其の頃倭玉篇の存し且つ字書の代表者たる用をなしたらんと想像せらるゝは天文十七年(更に廿年)に成れるかと云はるゝ運歩色葉集の和部に 皇代紀 倭玉篇 と出せるにて著し。

蓋し普通なる漢字に和訓を附して讀書の用に供したるに字鏡集あり。この書は今傳はれるものにて應永廿三・四年(足利五代將軍)の書寫と見ゆれば假名玉篇より廿餘年前なり。而もこの書が玉篇に負ふ所多きは、其の寛元本の奥書に

朱點東宮切韻黑點唐玉篇也

とあるにて明かなり。但し之に據りて往々此の書をも倭玉篇の祖たるかに云ふは如何あらん。見よ字鏡集が一部に收むる文字の多く、又各字の訓の多きを。例へば日部に收むるもの四百十五字、日の字の訓は七

マ、ニ 1 テラス 2 ヤスシ 3 ヒ、ニ 4 ヒ 5 マコトニ 6 ヒル 7

## 時の字の訓十九

トキ 1 ミル 2 コレ 3 タチマチ 4 シハラク 5 タスク 6 ツフサニ 7 トキナ  
リ 8 モトヨリ 9 ヨリ 10 トキ 11 イマ 12 コ、ニ 13 アキラカ 14 ヨリ  
15 ウツ 16 物ヲウ、ルナリ 17 ヨシ 18 コノ 19

の類にして、和玉篇(米澤本を用ふ)の日の字の訓二

ヒ 1 ムカ 2

## 時の字の訓六

ツカノマ 1 サカユ 2 トキ 3 ミル 4 コ、ニ 5 コレ 6

の簡短なるとは同日の論に非ざるを。況や字鏡集は天象地儀などゝ部門を分てること、單にたゞ部首を立てたる玉篇とは異なるをや。但し下にもいふべき玉篇要略集の介在は此の字鏡集の脈を引ける者やがて専ら玉篇の體裁を襲ふものとなれるを證するなり。

倭玉篇一たび出づるや頗る時好に適したりけん、長享より寶永に至る二百餘年の間に四十

種に近くつぎく<sup>く</sup>に成りたり。請ふ各々その大概を記さん。

# 1 各 本

## (1) 倭玉篇かと云はるゝもの二種

今日倭玉篇の名を有せねども其の内容より見て其らしきもの二有り。

(一) は字鏡集の屋代本なり。字鏡集に應永廿三・四年の古寫本を存し天象地儀等の部門別なること上に已に之を述べぬ。字鏡集類字抄出書名の伴信友の跋によれば字鏡集には

源定信朝臣(松平越中守藏本 近江國石山寺所藏古本 屋代弘賢翁藏本  
の三種ありて、其の屋代本には表紙に 和玉篇 と有りといふ。信友は之を  
屋代本無題名、表紙書、和玉篇蓋後人之私所題也

と斥けたり。字鏡集には寛元三年北條時頼の世の跋ありて 小河法印承澄示云の文あり。尊卑分脈によれば承澄は藤原師家の子にして師家は仁治(同泰時の世)に薨じたれば寛元の頃は承澄の活動せる時なるべし。寛元は上に引ける書籍目録の成れるよりも二百年の前たり。假名玉篇が此の目録の前に世に出でたるや論なきも此く迄に洵るべきか。信友が屋代本に和玉篇の名を負はしむるを否めるは妥當の見ならん。

(二) は(一)の場合と反對に和玉篇とすべきものより其の名の奪はれたる者なり。塙氏溫故堂の舊藏にて今は内閣文庫に藏せらるゝ篇目次第といふ一書を其とす。之を篇目次第といふの當らぬは國語學書目解題に辯ずる所あり。曰はく

此書表題の篇目次第といふは恐らくは原來の書名にはあらざるべし。其本を検するに初の二冊は紙の折目ごとに玉篇と記し、第十一冊は外題に篇目次第と記したるを消して和玉篇と改め記せり。其他は外題にも紙の折目にも小口書にも皆篇目次第とあり。蓋し此書もと和玉篇或は單に玉篇と云ひしものなるが、其卷首偏傍の目錄を記したる所に篇目次第とありしを後に寫すもの誤り認めて書名とせしならん。されどなほさすがに一部分に原名残りて和玉篇或は玉篇と記したる所ある者なるべし。

と。この書全部三卷より成ること偏傍の目錄に著きが現存せる者は十一本にて未缺け、上卷中卷各々四本に分れて下卷三本之に繼ぎたれども全部首三百九十七の中なほ百十一部を残せるを見れば下卷は四本以上たらん。この三百九十七の部首は土に起りて、に訖りたれば、玉篇の一に起りて亥に畢るとは全く異なり。

## (2) 長享本

龜田吟風學士の和玉篇考(稿本)に曰はく

毎卷題して 和玉篇 とあり、其の原名なりや否やを知らず、上中下三卷。半面七行六段にて縦横の罫あり、縦八寸九分、横六寸九分。

上卷 目錄一葉、本文日一より魚卅二まで五十四葉。卷末に長享三八月日とあり。

中卷 目錄一葉、本文虫三三より食百五まで五十五葉。

下卷 目錄二葉半、本文禾百六より亥三百十二まで四十三葉半。但し終の二葉即ち辰三百十戊三百十一 亥三百十二 の三部二葉は罫もなく墨色も異なりて後人の加へたるものと思はる

卷末には行書にて左の二行あり

長享三年之書寫本

和玉篇三冊

□(一字不明)水所藏(印)

とあり。此の本を藏せられし中田法學博士は東大教授室にて著者に語られぬ

濁音には二個の小圈を付したり、今半濁音に一個の小圈を付する所以も之にて明らめられぬべしと床しく思ひたる外には専門以外の事なれば特に記憶せることなし。

常に自宅に在りしを本學國語研究室にて其の副本を作るべしと云ひたれば持參せり。

其の副本成りて返されしを苟且に教室に置きたる爲に遂に烏有に歸したり。副本を作らんの企なかりせば其のまゝに自宅に存して災を免れたらんを、其の書を寶惜するの舉

却て之を亡すに至れり。

龜田學士は又「この書の部首は慶長十年本と全く同じ」とも云はれたれど、十年夢梅本は上卷魚三十一に終れば本書よりは一部少く又部首の總數百九十五にして本書の三百十二部なるとは同じからず(夢梅本には附部多きが、之を數ふれば四百四部となりて猶本書と異なり)。學士は燃犀の明ある人、豈この杜撰の言をなすべけんや、其の言必ず依據あらんに今は之を確むべき途なきこそ返すも惜しき極なれ。

(3) 玉篇要略集(圖版十二參照)

長享本の既に存せぬ今日は玉篇要略集や最古の和玉篇たらん。

この書は安田文庫の所藏にして、大永四年の奥書あれば長享三年よりは三十五年の後とす。三卷より成れるが其の部門を見るに上中兩卷にてまとまり、下卷また一巡となるを見れば或は兩卷先づ成りて、下卷は更に追加せられたるに非ざるか。

玉篇にして部門を分つも奇なれど、上中兩卷に

天象 地儀 植物 動物上卷 人倫 人體 雜物 食物 辭字中卷  
あり、下卷に

天象 地儀 植物 動物 人倫 人體 雜物 光彩 方角 員數 詞字

ありて、天象にては雨風日月<sup>上卷</sup>夕の、地儀にては土山邑水石門穴<sup>上卷</sup>川丘里京戸<sup>下卷</sup>の部首を出

せるは便利なりといふべし。この部門は

天象 地儀 植物 動物 人倫 人體 人事 雜物 食物 光彩 方角 員數 辭字  
の十三と見るべきが、この十三門は上にも述べたる字鏡集のと殆ど同じく、字鏡集には雜物を立てずして飲食を立てたるを異なりとすべきのみ。然るに字鏡集の十二門が天養元年(近衛の御宇)より着手せられたりといふ伊呂波字類抄の十一門より出でたるは周知の事なるに、其の二十一門にては飲食雜物と相序でたるを見れば、本書は字類抄によりて二十一門中その初の十三門を採れるか、字鏡集に據りながら雜物の一門をも必要として字類抄に添りて之を復活せしめたるかならん。

半面淡き野にて八行に分ち、毎行八段、漢字を出してその左下に音を、字の下に訓を附せるが、訓の數は多からず。雨にアメ、フル雪にユキ、キヨム、震にフルウ、ヒンカシの二訓を收むる類。その音には靈にリン、リヤウの如き唐音、霽にテン、センの如き訛音をも附せるは奇なり。中々に古訓もあり朔にアラタム(字類抄にも見ゆ)賽にカヘリマウシスの類。

文字を出せる順序は宋、元本玉篇に据れりとも見えず。雨部にて云へば四十五字を收むるに過ぎざれば、其の名の如く要略の物といふべし。墨附四十三枚、第十七枚の裏にて上巻終るや直に中巻となり、第三十八枚の表末行にて中巻終りて其の裏の初行下巻となり又五枚にて下巻終る。卷の首に目次、後に奥書各々一葉あり。表紙にも内表紙にも「和玉篇乾坤」とありて

内表紙は紙質も筆跡も本文と同じき様なり。されど二卷ならぬは上に云へるが如し。

#### 卷尾に

時大永四年 閏逢淋瀝 卯月二日 三光末 派劫嶽書施 派乃至書の四字にかけて壺形の印を捺

鳥焉馬誤不少嗚呼慙愧

せり

此主

祝部寛治

祝部寛治郎

白米満玄

とあれば劫嶽といへる僧の書寫せるものを祝部氏白米氏の傳へたるものとすべし。而も劫嶽は此の著者なりや單に寫手なりや遽に定めがたし。上にも述べたる如く二卷にて一たび纏りたる物ならば之を上中と序づるは自然ならず。追加を合せて上中下とせるは著者よりも後の人のしわざならんと思はれ、且つ霽にカスミの訓あるは次の霞字の、竄入なるべく、等にアマヒユの訓あるはアマヒキの、霽にエタリの訓あるはアマタリ、河にカウはカワ、游にヲヨフはヲヨク、寓にミルはラルの寫誤なるべしと考へらるゝなど著者自筆の物にはあらざらん。字類抄は天養即ち平安朝の末に着手せられたるに假名玉篇は足利中季にやうやくその著録を見るより云へば、假名玉篇も字類抄に採用せられたる部門の影響を受くるはなか／＼に自然なるべく、此の見地よりすれば本書の體裁は、傳へらるゝ長享本よりは古き面目を傳へた

りとも云ふべし。換言すれば字類抄について起りし假名玉篇は本書の如き所謂合の子的の物にて、更について起りし物は字類抄の影響より脱け出で、部門の面影を留めぬ長享本の類となりしに非ざるかと想像せらるゝなり。

「西莊文庫」の舊藏にて末葉の左下と表紙の貼紙とに其の長方印あり。西莊文庫とは伊勢松阪の小津家の書庫にて、同家は名だゝる素封家にして一時の藏書の富は人を驚かすに足れりといふ。

(4) 米澤本

米澤藩學興讓館に傳はりたる古寫本和玉篇は今米澤圖書館に藏せらる。

表題は和玉篇とあり。内題は和玉篇目錄卷之、と標し、本文は日第一(上卷) 衣第一(下卷)と題して其の部の文字となる。半面八行八字詰なることは目錄も本文も同じく、野は無し。上下二卷に分れたれども装して一冊となす、

上卷 目錄一葉 本文五十一葉 この部首五十九

下卷 同 二葉 同 四十四葉 同 二百四十六

この部首を通計すれば三百五となりて長享本よりは七部少し。又その順序は日一より虫三十三までの間は長享本と同じけれど、其の後は全く異なり。

本文は其の右に音を、二音ある時は左右に附することなどすべて後世のと同じく玉篇要略

集の附方とは異なり。下に訓を付す。日にムカ昔にユクの如き普通ならぬ訓もあり。又同字なるべき晰哲を二字として出して晰チキツ 哲チキツ と分ち、時には崑昔には崑の如き異體を挙げたり。

序跋奥書等を存せず、その筆致は足利末期ならんと云ふ。

附 此の書の類本

(1) 便蒙字義(圖版十三參照)

著者の架上に此の名の古寫本あり。乾坤の二本たれど、實は中卷を缺く。前年鹿田松雲堂より購得せし者なるが、北尾墨香居の珍藏せし所といふ。半面八行六段、無野、字の右に音を、下に訓を出せるが、其の音は朱字たり。

乾の卷は目錄と標して日一乃至魚三十二を、坤の卷亦目錄と標して禾百六乃至倉三百九を收め、この丁數乾のは一丁、坤のは三丁たり、本文は日第一、禾第一百六より起りて内題なし。知るべし便蒙字義の名は後人の妄に加へたるまでに、本より存せしに非ざるを。

本書の部首を米澤本に比するに乾の卷にては本書には肉第三ありて小なく、坤の卷にては本書に存する豈豐面倉の四部彼になし。この故に本書の部首の總數は三百九なるに米澤本の部首の通計は三百四たり。又次第の異なるも二三なきにあらず。

部内の文字を見るに日部に云へば日より陽までの十五字は全く同じく、其の後九字の中

共通なるは六字なり。訓は彼に多き、此に多きありて何れを多しとも定めがたし。此等の事實は此の便蒙字義が一種の和玉篇たりしと推定するに足らん。

## (ロ) 元龜字叢

今傳はれる元龜字叢は末に宗珠藏主の識語さへ有れば此にて完結せる如くに見ゆれど、日一に起りて魚<sub>二</sub>に終れるは漢字を集めたる者としては餘りに其の部首の少き感あり。況や其の目錄の首には目錄上(帝國圖書館本による)とありて中下の若くは下の存すべきを暗示するをや。

そもく日一に起りて魚<sub>二</sub>に終るは米澤本玉篇及び便蒙字義と同じからずや。乃ち字叢を取りて字義に比較するに半面八行六段なるさへ同じく、日部にて日より疊までの百九十一字又月部にて月より臉までの二百二字は其の次第まで同じく、但字叢は部末に日部にては卅二字、月部にては十七字を増されたるのみ。さは云へ字叢常に多しともあらず、肉部は字叢は一行六字なるに字義は三行十五字に上れる類あればなり。又其の音訓も略同じく前節に出せる廿四字にて比較するに左の不同あるのみ。

- 1 字叢には日ジツの音なく、旻にミンの音あり
- 2 同 曙にアカツキの、暉にアキラカの訓あり
- 3 同 昏にクルルの一訓にてクニ、ユフサリはなし

此く酷似せる點及び其の不完らしき點より見て元龜字叢も亦和玉篇の一種とするは不當ならざらん。

川瀬一馬氏にも元龜字叢考上篇(下篇未見)ありて、丘(雜誌の名)昭和六年四月號に載せられぬ。氏は分類に於ても又總字數に於ても他の同類の辭書倭玉篇、類字韻等に比して著しく分量が少ない。むしろ本書の卅二部の分類に收められた漢字だけでは字形引の辭書としての使命を完うする事が不可能であらうとて、元龜字叢完本の姿は如何なるもので有つたであらうかと憧憬し、靜嘉堂文庫所藏の高臺寺開山紹益長老眞蹟元龜字叢一冊と古筆家の鑑定したるもの(今は古本玉篇と號せらる、偏旁數三百九)及び他の一本(今は字鏡集と題せらる、偏旁數同じ)を説明して、此の他の一本こそ元龜字叢の原形を示すべき完本にして、傳紹益筆本はかなり後人の補訂を経て本書の系統本より派出し來つたものと認められると結論せられぬ。いはゆる元龜字叢を不完本とせるは正に卑見と符合せり。又傳紹益筆本の偏旁三百九とあるは上に述べし便蒙字義と同數なれど、其の實第三十三の番號を重用したれば傳紹益本のは三百十にして一部多く、且つ各部の文字も

|      | 日部  | 月部  | 人部  |
|------|-----|-----|-----|
| 字義   | 一九〇 | 二〇二 | 三四八 |
| 傳紹益本 | 二〇三 | 二一三 | 三六二 |

の如く常に多し。しかのみならず共通の文字の間は其の順序略同じくして増多の字のみ傳紹益本の部末に存するも同じ祖本ありて此の本はそれに附加したりと考へらる(この本にて辻にはツシの訓のみあり、辻には音訓俱になきが、辻には音カク、訓ヲシハツラウ、ヲシフス、マロブ、フシマロフと有るも一笑)。此かれば元龜字叢の名はゆぐりなく附けられしにてすべて和玉篇のとりくゝの形と看るべきのみとするは著者の玉篇に心引かる餘りにはあらざるべし。

## (5) 鈴鹿本

龜田學士の和玉篇考に

本書は吉田神社社司中臣氏の舊藏たりしと見えて 陶啓朝臣之章 とあり。又鈴鹿氏、讀杜艸堂(寺田望南)、成齋藏書(重野博士)の藏書印も押さる。

美濃紙本にて上中下三卷を合せて一本とす、卷上には目錄なく、表紙の見返しに簡單なる目次を補へり。卷中には目錄第Ⅰとありて一枚、卷下には玉篇目錄卷第三とありて二枚あり

|    |     |      |       |
|----|-----|------|-------|
| 卷上 | 日一  | 魚一冊  | 本文卅七板 |
| 卷中 | 書卅二 | 食百五  | 本文卅七板 |
| 卷下 | 禾百六 | 倉三百八 | 本文廿六板 |

卷上中の末には和玉篇卷之Ⅰとあれど卷下には何もなし、半面八行八段。とあり。氏は東京帝國大學國語研究室所藏たりし其の寫本について述べられしものとぞ。

## (6) 大槻本(圖版十四、參照)

大槻文彦博士の珍藏、校齋森氏開万冊府之記の印あれば狩谷森兩翁の手澤本たり。二冊より成りて内題卷上中とあれば三冊にて完きに似たれど、部首の數より云へば現存せる二冊は四聲の中の平聲を終へて僅に上聲の八部に至れるのみ。

本書の特色はその部首が龍龜手鑑に据れることなれど全同にはあらず

|     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 手鑑  | 魚三五 | 戈三六 | 口三七 | ン五三 | 亭七五 | 牙七六 | 卑七七 |
| この本 | 戈三五 | 魚三六 | ン三七 | 口五三 | 牙七五 | 卑七六 | 亭七七 |
| 手鑑  | 水三  | 火四  | 土五  | 草六  |     |     |     |
| この本 | 水百  | 土百一 | 草百二 | 火百三 |     |     |     |

各卷五段、目錄は七行、本文は六行、堅野のみあり。四周双邊高さ七寸二分半、廣さ五寸二分半の廣板。兩卷ともに目次一枚、本文六十六枚づゝ。部中の文字は手鑑の如く奇僻なる者多からずと云へど、第一面のみにても金の字三つより成るもの(サ、ラグ、カフト、コカマの訓あり)、金扁に過を旁とせるもの(カマの訓あり)、藏を旁とせるもの(ス、ノコエの訓あり)等有り。全部古活字を以て印出す。

此の書の音にて奇なるは上卷にて初三十枚の間は撥ぬる音はムを用ひ其の後はンを用ふるが多き(間々然らぬも交れど)録<sup>シキツ</sup>釋<sup>リイッ</sup>詢<sup>シキム</sup>の如き古風の假名も存するが、一方には諄<sup>シム</sup>とも有る、又仆にホク(集韻には普木切とあり)幘にミヤウ(亦集韻には音冥とあり)輪にユ、尻にクワンの如き百姓讀を附けたることにて、訓にては字<sup>ニハ</sup>(慶長本、寛永本等にも有り)禮<sup>リ</sup>(慶長本、寛永本にはコトワル)示<sup>シ</sup>(慶長本、寛永等にはなし)の如き普通ならぬも有り。

## (7) 慶長十年東井本

慶長十年はいかなる年なりけん、東井本を初め賢秀夢梅の二種までも世に出でたり。この前年に大廣益會玉篇の上梓せられたると關係ありやなしや、この年に成れらんには其の着手は更に古かるべく、大廣益本に促されたりとも云ひ難からん。

和田雲村の訪書餘錄第五編古刊本第二章佛書以外の古刊本の條に玉篇四種(一は鉄山の大廣益本)を出して

## 玉篇三卷

卷末刻記 斯玉篇者云々(9の夢梅本の條に)

## 玉篇三卷

卷末刻記 慶長乙巳上元日 東井叟云朔

## 倭玉篇 三卷

卷末刻記 慶長庚戌仲春日(10の慶長十五年本の條に)

と著録せるの東井本なり。東井は玄朔といふを普通とす。倭板書籍考に慶長十二年刻の難經本義は延壽院東井玄朔の門人道救の校にて東井翁の跋ありと云ひ、慊堂日歷に

東井文庫 今王子の翠竹院の子玄朔は東井と號し、所藏の書には皆東井文庫の印を用ひしが子孫も沿用せり。

と云へる類。

## (8) 慶長十年賢秀本(圖版十五參照)

宮内省圖書寮に著者自筆ともいふべき稿本を傳へたり。一部三本

卷上 日第一月二肉三——非七十三 瓜七十四 瓜七十五 五十二枚

卷中 人第一言二之三——谷七十二 處七十三 四十四枚

卷下 糸第一竹二玉三——寸六十七 勺六十八 斗六十九 雜篇七十

異同字監七十一 同異字迷七十二 四十七枚

なれば部首はすべて二百十八たり。日月に始まるは米澤本と同じけれど其の他は毫も同じからず。

卷上の末には一葉を増して、又卷中にては末頁の裏に俱に

慶長拾稔乙巳癸寶上句書之畢天臺末流南山沙門賢秀法師位二行



卷下の末には亦一葉を増して、更に長文なる(圖版にあり)の識語あり。之によれば賢秀は此の本を寫したる迄にて著者には非ざるか。廿歳の弱齡にして、普通の人ならば此の著作は成し難かるべければなり。

半面八行九段、訓多き時は二段を占めて其の多きを貪れり。例へば

|      |           |         |          |        |        |         |       |
|------|-----------|---------|----------|--------|--------|---------|-------|
| 一    | ツフト 1     | ツクス 2   | ヨコサト 3   | ヒトタハ 4 | ホタクヒ 5 | ハシラ 6   | モハラ   |
| 7    | マロナリ 8    | ウヘ 9    | モト 10    | カクス 11 | キハム 12 | スナハチ 13 | キミ 14 |
| サ    | モアラハアレ 15 | メクル 16  | スクル 17   | カラル 18 | カミ 19  | ヤム 20   | コトナシ  |
| 21   | ツフニ 22    | トモ 23   | ハシメ 24   |        |        |         |       |
| 上    | ノホル 1     | ホトリ 2   | ハツク 3    | ノル 4   | ユク 5   | イタ、ク 6  | ヤタシ 7 |
| マル 8 | トホシ 9     | ハツヲ 10  | ウヘ 11    | ナヲ 12  | マホル 13 | カミ 14   | マエ 15 |
| ク 16 | タテマツル 17  | タウトシ 18 | ウツクシム 19 | サカヘ 20 | タカシ 21 | スクル     |       |

又異同字監は 旦且 書畫の類五十七對、同異字迷は憫愍 迹蹟の類三十五對より成る。前者に已己巳とあるは難字記陽春廬雜考に足利の世より慶長の末までに成れりと云へりに已己巳と出せるを正したる者ならんか。

(9) 慶長十年夢梅本(圖版十六參照)

この本は嘗て徳島中學にて、ついで東洋文庫にて見たれば同じ刊本にても東井本に比しては流布せるに似たり。文庫本は上中下の三本とし、之を各々本末に分ちて六卷とすれど下卷は他の兩卷の如く其の目次にて分れぬを見れば五卷たるべきものか。部首を立つることすべて百九十七なれど(上本 18 末 13 中本 26 末 45 下 95)上末以下にも附部多し、その附部も足に疋、心に思、窓を屬せしむるは理ありとせんも它に卵、黽至を、耑に率、索、辟、苟、ヒ等をまでも繋けるは何の理あるか。これらを數ふれば部首は四百四たり。

目録を出すに上本のみ一行六段、その他は五段、本文は通じて六段。上の本第一葉の表に目録を出して裏より本文となりて丁附六十四葉。末第一葉の表に目録を出し裏は空白のまゝとして次葉より本文、通し丁附にて百四葉。次に新加偏傍正俗不同例を出せるは大廣益會本第三十卷の末のなるが、たゞ凡音殊の一字多くてすべて十一字。中の本末はともに第一葉の表に目録、第二葉より本文となりて上が五十一葉、下が五十四葉すべて百五葉、尾に 玉篇中終の四字あり。下の本は第一、二葉に目録ありて第三葉より第四十四葉までが本文なるが、柱に丁附ありて本文のみを數ふ。末には別に目録なし(本のに見ゆ)。丁附も上のを承けて第七十二葉に至る。其の目録は丁一百九十五に終るに本文は猶 黃一百九十六米一百九十七の二部多きも奇なり。次に奇字指迷、字當避俗、字當从正、字之所從、字之取非を出せるは全く大廣益會本に據れるが文字の訛誤少からず。

卷末に左の識語あり

斯玉篇者以禮部韻會龍龜手鑑等校合旃書寫者也 時慶長旃蒙大荒落禡月日夢梅謹記  
旃蒙は乙、大荒落は巳なれば亦慶長の十年とす。又禡は年終祭名なれば年末の版行たりと知る。

この書は和玉篇中最も漢文を多く載する者にて開卷第一行の六字にても

目陽之精也

旻秋也

時春夏秋冬四時也

早晨也

曙東方明也

とありて亦大廣益會本より摘出せるなり。

(10) 慶長十五年本

之に二種あること普通に知らるゝ所なり、例へば和田雲村の訪書餘錄第五編古刊本第二章佛書以外の古刊本の條に

倭玉篇 三卷

卷末刻記 慶長庚戌仲春日 次に黒地白字にて 於洛陽二條通二王門町開板 あり。

又此他に別本あり、版様全く相同じけれど卷末にある於洛陽云々の十二字を缺く。

第三章類本の條に 八、倭玉篇の項ありて(甲は東井本のことにて卷末刻記を出すのみ)

乙、倭玉篇

卷末刻記 慶長庚戌仲春日 黒地に白字を以て 於洛陽二條通二王門町開板 附刻せるもの

丙、同上

卷末刻記 單に慶長庚戌仲春日とのみ附刻し、於洛陽云々なきものとある類。著者の所藏も亦前本。

然るに實はこの刻記少き者にも二種あるなり。吾が内閣文庫の書目に第二六六七九號二六六八〇號とあるは俱に刻記少き者なるが

第二六六七九號本

第二六六八〇號本

柱が多く復行(上卷にて云へば第15 16 19

柱が多く單行(上卷にて云へば 8 9 10 11 17

39 47の五葉は單行)

18の六葉は復行)

卷中第七十九葉にて高さ七寸一分

同じく六寸九分五厘

卷下第一葉にて七寸二分

同じく七寸弱

部首卅五を頁

同じくを頁

イヅルの字を出

同じくを出

の相違あるを見るべし。

何れも毎面目録五段本文四段、半面は通じて七行。部首すべて四百七十七

卷上 一一―是百廿六 卷中 八百廿七―四百七十五 卷下 冥二百七十六―玄四百七十七

この一―是 八―固 冥―亥 の分卷は正に宋本玉篇の始中終各々十卷の首尾と一致するものなり。但し宋本五百四十二部のいづれを棄て、四百七十七となし、かは下の寛永五年本の條に述べん。

蓋し部首四百七十七は類字韻また然り。國語學書目解題に

類字韻 二卷 撰者未詳 寫本

この書は和玉篇の類にして扁旁によりて漢字を排列し音並に訓を添へたり。卷端に分毫字をも添ふ。蓋し三百年以上の寫本、初辭通韻と合せて一冊とす。

と云へるものにして今松井簡治博士に藏せらる。部首の數のみならず順序も亦同じ。本字の右に音(二音ある時は左にも)下に訓を付し、時には祺に吉也 禕に美也 紫に祭天などの漢文の注もあるが、大廣益會本を検すれば美也は美貌の、祭天は祭天神の訛略なるに似たり。

(11) 慶長十八年本

訪書餘錄第三章類本の條 八、倭玉篇の項前節に引けるさし次ぎに

丁、倭玉篇

卷末刻記 乙號(前節に引く)の刻記と全く同文にして、其次行に 慶長癸丑仲冬日開板

之 と加刻したるもの

戊、同上

卷末刻記 單に 慶長癸丑仲冬日開板之 とのみ附刻せるもの

とあれば、此にも二種あるなれど、著者の目睹したるはこの戊の分のみ。

この本は大體に於て十五年本の刻記少き者と同じけれど、野の高さ彼は七寸二分五厘、此は六寸九分五厘、濶さは五寸七分、此は五寸六分にて稍小形なること、又酉第四百七十四部に於て彼は醜の字の旁を上貫けるに此は然らざるによりても其の異板なるを知らるゝなり。

(12) 元和縮刷本

龜田學士の和玉篇考に

横本三冊より成る。目錄は七行五段、本文は七行四段なるも全く慶長十五年本と同じく、たゞ高さを縮めて之を刷出せるのみ。竪四寸六分、横六寸五分。

慶長本は柱に 和玉篇卷一 とあるに、此は 和玉、 とあるのみなるも異なり。

とあるもの。著者の見る所を補へば目錄は卷毎に丁附を改めてすべて六葉なるを卷首に出し、その部首の番號百までののは部首字の下に、百以上のはその右に註したるも慶長本と異なり、又音訓は慶長本と同じきこと考にも云へる如くなるが、之を出す順序は全同ならざるなど大

(13) 寛永五年本

中又  
下は

奥書に

時寬永五歷戊辰建丑月吉祥日刊摺之畢

下卷 冥一亥五四二

と有るもの。而して龜田學士は又左の如くも云へり。

倭玉篇は慶長創刊以後二系統に分れた様である、一は慶長十五年庚戌板本の系統で十八年の再刻となり、元和頃の縮刷となり、寛永廿年に至りて眞艸倭玉篇五冊の美濃半截形横

然るに寛文になると畫引本が出て様式も大に變化した物となる(典籍之研究)

増補本とは畢竟宋本の五百四十二部を用ひたるものにして、慶長十五年本が四百七十七部と

して出されたる系統のに對して六十五部を増補せるの謂なり、その六十五とは大廣益會本の

部首番號にて

|                                                       |                                                                    |               |                                          |                                                             |                                            |
|-------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|---------------|------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|
| べき部首言が<br>477<br>とされり)                                | 433 320                                                            | る             | 254 152                                  | 19                                                          |                                            |
|                                                       | 439 322                                                            | べき部首言が<br>275 | 267 165                                  | 五年本は<br>137                                                 | 38                                         |
|                                                       | 445 324                                                            | べき部首言が<br>275 | 275 170                                  | たる                                                          | 43                                         |
|                                                       | 464 325                                                            | となれり)         | 287 171                                  | べき部首是が<br>126                                               | 51                                         |
|                                                       | 472 326                                                            |               | 292 172                                  | となれり)                                                       | 57                                         |
|                                                       | 478 327                                                            |               | 294 174                                  |                                                             | 77                                         |
|                                                       | 495 344                                                            |               | 311 176                                  |                                                             | 85                                         |
|                                                       | 497 353                                                            |               | (巻廿まで<br>312                             | 178 180                                                     | 102                                        |
|                                                       | 508 355                                                            |               | 312 181                                  | 180 181                                                     | 105                                        |
| (巻卅まで<br>542<br>の中以上<br>65<br>を減する<br>故に<br>542<br>たる | 363<br>373<br>374<br>384<br>394<br>398<br>402<br>403<br>417<br>422 |               | の中以上<br>37<br>を減する<br>故に<br>十五年本は<br>312 | 184<br>186<br>190<br>209<br>216<br>221<br>237<br>239<br>244 | 122<br>(巻十までの<br>中のこの<br>11を引く<br>ゆゑに<br>十 |

第六章 倭玉篇

## (14) 寛永七年本

靜嘉本文庫にて目睹す。増補本、三本

半面九行、目録は六段、本文は八段。上卷四十四葉、中卷四十七葉、下卷四十三葉、毎卷に目録ありて直に本文につづく。縦野のみにて横のは無し。時に漢文の注あることも慶長十五年本と同じ。下卷の尾に行書にて

寛永七庚午年孟夏上澣開板焉 杉田良庵玄與

とありて跋文めくものは無し。

## (15) 寛永九年三月本

三本、増補本。上卷五十葉、中卷五十三葉、下卷四十九葉、いづれも目録もこの葉數の中とす。

たゞ奇なるは中卷の目録には明三百十一 罫三百十二 とある(大廣益會本と同じ)に、本文にては、罫三百十一 明三百十二 と序でたることなり。

半面八行八段。卷尾の墨記は

寛永九年壬申三月 中野市右衛門刊行

とあるのみにて識語はなし。

## (16) 寛永九年孟夏本

前本と異なるは卷末に

寛永九壬申年孟夏上澣開板焉

とあるにて明らかなり。發行書肆名なし。

半面九行なれば枚數も前本より減じて、下卷は四十三葉にて終り、その裏の第七行に 倭玉篇卷下終 第八行に艸艸にて例の墨記を出せり。野の高さ七寸八分、濶さ六寸二分五厘、題簽に 大廣和玉篇 とあるも奇。

以上は龜田學士が其の下卷のみを藏せらるゝにつきて述ぶる所。

## (17) 推定寛永本

龜田學士の所藏に又首尾缺けてその年月を知り難き一本あり。學士は云ふ、寛永中の刊にて其の十年までの物ならんと、よりてこゝに序づ。

卷上第九葉征佶の字より下卷第六十八葉六の字までを存す、半面十行、四段、豎野のみにて横なし、野の高さ三寸九分、濶さ六寸四分、横本。

本文四段なるは慶長本の形なるが、其の系統ならぬは慶長本は份征佶と出せるに此には份字なく、又六の字の音慶長本はロクと出せるに此にはロクとあるにて明らかなり。さて慶長本は征佶が第十八葉裏第三行にありて卷初よりは第二百四十八行目(半罫7行×表裏2×17罫+3罫)なれば之を此の本に換算すれば第十三葉表第八行[248行+(10行×表裏2)=12枚+8罫]に其の字有るべきに今第九葉初行なるは慶長本よりも文字少き一種の物たらざるべから

す、即ち非増補本増補本の外に略本も存したりと推論すべきに似たり、首尾完全なる本の出でんこそ望ましかれ。

(18) 寛永十五年

こゝに至りて初めて新刊倭玉篇の名あり、増補本。

半面九行九段、開卷首行には何れも 新刊倭玉篇卷、と白字にて題し、目次之に次ぎて上卷四十一葉、中卷四十三葉、下卷四十葉(ともに目次をも含む)あり、而も表紙の題簽には 新編和玉篇 とありて内題と異なるは家藏本のみ然るならんか。

各字の訓は前記の九年三月本よりも少きを常とす、例へば

|   |      |       |      |      |     |       |      |      |
|---|------|-------|------|------|-----|-------|------|------|
| 一 | ハジメ  | ヲナジ   | ヒトリ  | スクナシ | ヒトツ | カタクナシ | ヒトタビ | ヒトツラ |
|   | モツハラ | ヒトエニ  | キワマル | カズ   | スケ  | ヒトシク  |      |      |
| 上 | ノボル  | タテマツル | イニシエ | クワウル | アガル | ノル    | ウヘ   | カミ   |
| 禁 | ミヤコ  | タツル   | イマシム | ヲサム  | タエン | ヤム    |      |      |

に於て○を付せしものを棄てし類にて、この訓が奇僻なる爲ならぬや論なし。漢文の注も折々出せるが其の文字を書僻めたる多きは板下を書きしものゝ文盲なりしか刻手の未熟なりしか。

卷尾に左の識語あり

此玉篇三冊者蓋改古爲新而益鳥跡以補不假字乃壽梓者

寛永戊寅仲冬日

寛永五年本の識語も解し易からぬに、是に至りては讀を下し難かるべし。

(19) 寛永十六年本

この本はうち見たる所、十五年本と同じけれど、卷尾に

寛永十六歳己卯仲秋吉旦

とあり。

さては前板の再刊にて、奥附のみ改めたるかといふに

| 行の高さ                                          |       | 半面の濶さ(匡廓の外邊より板心まで) |      |
|-----------------------------------------------|-------|--------------------|------|
| 上卷第一頁                                         | 下卷末頁  | 上卷第一頁              | 下卷末頁 |
| 前本                                            | 七寸七分約 | 七寸七分五厘             | 五寸二分 |
| この本                                           | 七寸六分  | 七寸七分               | 五寸一分 |
| の相違あり。木板なれば縮みもすべけれど僅に一年間にこの變化あるべきか、恐らくは別板ならん。 |       |                    |      |

(20) 寛永二十年本(圖版十七参照)

卷三・四・五を合せて一冊とせる零本、今神宮文庫に藏せらる。縦四寸、横六寸四分の横本にて

眞艸兩艸を收む。

開卷の初行には白字にて 眞草倭玉篇卷三目録 と出して、毎行七段、卷四・五のもつぎ／＼にあり。その部首を見るに非増補本なるが、順序はやゝ違へる所もあり。本文は四段、右に眞書、左にその艸艸を並べ書し、音訓は眞書のに附けらる。卷末に左の三行あり

寛永癸未初夏吉旦 三條通菱屋町 林 甚右衛門

此の書にも前後兩版あるに似たり。九州帝國大學の春日教授は卷二・四の二本を藏せらるゝが、其の卷四を神宮文庫本に比するに全同なれども紙質印刷ともに較劣り、同文庫司書岡田君の説に據るゝ而も卷二に比するも亦同様の觀あるは卷二は必ずや神宮文庫のと同板たるべく、卷四は其の後刷たらん。而して此の二本は舊の題簽を存して五本として出せること明かなれば神宮文庫のは後に合綴して目録を纏めて出しゝならん。其の一・二と三・四・五との二本に纏めたるか、三・四・五のみ存せるを然せしかは今詳かにしがたし。

眞艸本は管見にてはこれを始とす。徳川時代には公文書を初め通用の字艸は艸書なりしかば此の書の時好に投ぜしや知るべく、是非増補本の如き、時代に逆行せしものゝ猶こゝに至りて世に行はれたる所以ならんか。

(21) 新刊眞草和玉篇

龜田學士の藏。三本、各本にその目録ありて、白字にて 新刊眞草倭玉篇目録 と行艸に記

せるが、目次の文字は全く寛永十五年本に同じく、恐らくは彼を板下に用ひたるならん。

本文は上に眞艸、その下に草艸を同大に出し、その右に片假名にて音、左に訓を附す。時に漢文の注を加へたるも十五年本と同じ、九行九段。

卷尾に

此眞艸倭玉篇三冊者蓋改古爲新而益鳥跡以補不假字乃壽梓者也

とあるも十五年に據りて、其の玉篇と有りしを眞艸倭玉篇と改めたるまでなり。板行年月および書肆名ともに無し。

本書は前の廿年本と先後何れなるかを知らず、彼には新刊の文字なければ姑く前に序でたり。又思ふに彼は非増補本なりしを以て更に増補本に艸艸を加へて本書となし、隨て新刊の二字を加へたるに非ざるか。

(22) 正保三年本

行數、段數も音訓もすべて寛永十五年本に同じ。

卷尾には

正保丙戌仲秋上旬 書林 豐興堂新梓行

の二行ありて、板も堅横ともに稍縮まれり。

(23) 正保四年本

行數、段數、音訓すべて前本と同じ。たゞ、新刊倭玉篇卷、の内題、前本は白字たるに此は黒字たると、野の高さ一分だけ短き(濶さは同じ)と異なり。

卷尾に

正保丁亥仲秋上旬

書林 豐興堂新梓行

とあるも前本の干支を改めしのみかと思れば其の位置この本は稍高し。丙戌、丁亥ひきつゞきて同書林にて二板を起す如きは受取り難きことなれど今述べたる如き相違は有るなり。

(24) 慶安二年本

眞艸二鉢なること、横本五冊より成ること俱に寛永廿年本と同じ。

龜田學士の和玉篇考に

内題 眞艸倭玉篇卷、

半面 目錄は八行五段、本文は十行四段

卷一 目錄一枚 一一 足七一 本文八十三枚

二 " " 骨七二 木一四五 " 七十七枚

三 " " 二枚 林一四六 殺一四八 " 七十六枚

四 " " 車二四九 燕三三九 " 七十七枚

五 " " 鳥三四〇 亥四七七 " 七十六枚

卷中毎段眞艸並べ書す

卷尾に位牌形にて

慶安二<sub>丑</sub>己歲孟春上旬

杉田勘兵衛尉 開板

とあるもの、而して學士は又

慶安二<sub>丑</sub>己仲秋吉旦

書舍 林甚右衛門 刊

と奥書せる本をも嘗て見たりと云はるれど未だ管見に及ばず。

(25) 慶安三年本

亦眞艸本、榊原芳野翁の藏たりし物、今帝國圖書館にあり。

美濃紙二ツ切の横本にて五卷なりしを今は一本とせるも、毎卷の枚數はともに前本と同じ。されど本文が十行五段なると左の奥書とにて前本と異なるを知る。

慶安三庚寅歲

三條通菱屋町

林甚右衛門板三行

この本には前本に存せし目錄を缺きて、而も一に起り葵に訖る畫數順のを補へり。この目錄が各部首の下に註せる丁附は全部通じての枚數なれば、五卷に分卷せるこの本には吻合せず、或はこの目錄は後人がこの本のならぬを妄に合綴せしか。

(26) 慶安四年本

題簽には 新刊和玉篇、と新板の二字を冠し、内題には 新刊和玉篇卷、と白字にて出



せり。

目次六段、本文九段、ともに十行、音訓は寛永十六年本に同じく、増補本。下巻の尾には 倭玉篇卷下終 の六字のみありて、此玉篇云々の識語を出し、その次に位牌形にて左の二行あり、この余氏は慶安二年に大廣益會本をも出せる書林たり。

慶安四曆初春

新開板  
書林余氏合梓

(27) 慶安五年本

前本と同書林の發行なれども、半面十行(目次、本文の六條なるは舊のまゝ)なるにてその異板なるを知る。随て丁數も

|     |    |    |   |    |    |   |    |    |   |
|-----|----|----|---|----|----|---|----|----|---|
| 前本  | 卷上 | 四一 | 枚 | 卷中 | 四三 | 枚 | 卷下 | 四〇 | 枚 |
| この本 |    | 三七 |   |    | 三九 |   |    | 三六 |   |

の相違あり。この爲に前本にては倭玉篇卷下終 の一行は第四〇枚表に有りしにこの本にては三十六枚裏となり、こゝに一行食み出して識語及び位牌形を収めたり。

(28) 寛文二年本

外題には 新增補和玉篇、内題には 増補倭玉篇卷、とあり。

増補の二字を冠する理いかん。嘗て増補本と稱せし寛永本を取りて相比較するに、この本は示部に於て部末に禪以下の八字、玉部に於て寛永本より十六字を刪りて更に二十五字を加へたれば畢竟は九字を増したる類なればならん。蓋し寛文と云へば江戸城内に紅葉山文庫の建てられし寛永十二年より廿四年、林道春の歿せし明暦三年より六年の後なれば社會はこの増補を要求せるか。

寛永本食部に 發飭 同上 飭飾 とあるをこの本は發を收めずして 飾飭 同上 飭と正し、玉部 琤 以下每字の漢文の注を削りて 琤にヨキイシ 玢にタマ の訓を附して和玉篇らしくし、又訓にても寛永本の 天ヒクイ をヒタイに 下コミ をヲル、に改めたる美點あるが、なほ誤れるまゝなるも多し。

之に二種あり、靜嘉堂及び家藏のには

寛文二年壬寅中春吉日 丁子屋長兵衛板行二行

とあるに、宮内省圖書寮及び龜田學士所藏のには丁子屋云々の一行なし。

(29) 寛文四年本(圖版十八、參照)

袖珍倭玉篇 と題し、美濃紙四ツ切を更に二ツに折りたる小形にて、八行に分ち每行八段。各部の中は畫引に改めたるを以て一見、字彙の風をなせれど一に起り亥に訖れるになほ玉篇の面影を存せり。卷尾には

寛文四年仲夏吉日

とあるのみにて發行書肆の名なし。

(30) 寛文七年本

静嘉堂文庫に藏せらる、美濃紙半切り本五冊

内題に 眞草倭玉篇卷、とあり。毎冊、目より始まりて本文となりて分卷は慶安二年本と同じく即ち非増補本なり。

目次本文ともに八行五段、右に眞躰、左に艸躰を出し、音は右に〔兩音あれば左にも〕訓は眞躰の下に出すを本躰とす。縦横の野ありて全高三寸八分、濶さ六寸。

寛永廿年本とは幅員を、新刊眞艸和玉篇とは眞艸體の位置を異にすれば其等の覆刻と云ふべからず。而も新刊眞艸和玉篇の出でたるより二十餘年の後の此年に非増補本の系統のもの、出でたるも奇ならずや。

第五卷の尾に左の二行あり

寛文七丁未年孟春吉日 吉田庄左衛門板行

(31) 寛文十年本

龜田學士に藏せられ、龍谷大學にも有りといふ。

題簽に 増補和玉篇 とありて三卷、増補本。先づ 新刊畫引和玉篇総目錄を出して本文

となれるが、目錄は畫數順に序で、本文は仍ほ一に起りて亥に訖る。十行十一段、縦横の野あり。

最終に左の二行ありて書林名は行書にて記さる

寛文十戌年孟夏申旬 山本十郎兵衛開板

蓋し寛文十一年には韻附字彙、十二年には頭書字彙さへ出で、畫引の便天下を靡せる時なり。四年に畫引を加味せるもの出で、漢玉篇にては慶安二年〔寛文十より廿一年前本に既に之を認む〕この年亦この本の現れしも宜なりけり。

(32) 寛文十二年本

美濃紙半切りの横本、一本。野高さ三寸四分弱、濶さ五寸五厘

見返しより畫數分けの目次を出したるが、此は十四行七段。本文は十六行八段。内題には畫引和玉篇 と有るのみにて新刊などの文字なし、卷末にも亦 畫引和玉篇終 と有り。又左の墨記あり

寛文拾二壬子曆 五月吉祥旦 山森六兵衛刊行三行

(33) 延寶九年本

龜田學士の和玉篇考に

増補本なり、部首五百五十四

寛文二年本をそのまゝ重刻せるものなり

分卷は三なれど合せて一冊となす、目録、本文ともに十行十一段  
終に 延寶九酉年三月上旬 井筒屋六兵衛板 の二行あり

とあり。按ずるにこの本亦畫引本なり。彼の寛文二年本は未だ畫引ならねば、寛文十年本の重刻といふべきならん。

今十年本を手にしぬを以て十二年本を以てこの本と比較するに、内題に於て卷首には 新刊畫引和玉篇とし、尾には 新刊和玉篇畫引 として打合はぬさへ同じきが、部首に於ては出入あり、十二年本には第八畫に收めたる采受をこの本には七畫に廻し、十二年本に有る卯炙端の部をこの本には脱したるの類。

(34) 増訓畫引和玉圖彙(圖版十九參照)

一本、首に中村甚之丞榮成の序ありて、榮成が齋居の暇に此の書を成せりと云ひ、次に凡例五則ありて、乾象坤儀飛潛動植等の圖四百七十四を挿みたること、俗字三千四百餘を圖の傍に附したる事、篇冠易考疑字早考後の檢字に當るを出し、ことなどを云へり。

次に目録あり、畫引本と同じけれど、時にその順を變へたるあり、その故を知らず。次に篇冠易考ありて 肉月心丫の類十九字を、疑字早考ありて帝在上字畫 旁同の數百四十六字を出し、五十母字之に次ぐ。

本文十一行、每行十字、收字の範圍と之を出す順序とは畫引本と同じ。時には祓の下に妖怪、

皇の下に天皇、帝皇の如き熟字をも注す。

上欄はいはゆる圖にて、上部にては帝王、示部にては神社、祝、鬼神、祭、禁裏の類を圖示し、又禮坎の如く圖示しがたきは短文にて説明せり。

卷末の奥附は左の如し。

元祿六癸酉年三月上浣

人見孫兵衛 板行  
書肆 杉山嘉兵衛

(35) 小篆増字和玉篇綱目

上中下三卷に分つこと舊の如し。見返しには左の如くあるに、總目録の標題にも每卷の始

篆楷二體  
校訂 筆畫 魚馬  
廣益和玉篇  
攝城書林萬卷樓新刊

終にも 小篆増字和玉篇綱目 とありて之と符せず。綱目の語は玉篇にはふさはしからねど、各字に小篆あるを以て然呼びたるものか。

この書の著者は偏傍を篇旁と記せる如く、諸篇目録とも、各部首を一篇、上篇とも云へり。その總目録は畫引本の如く部首を畫數によりて序でたれど畫數を標せず。本文の文字も畫引本の順なれど亦畫數を云はず。その狀畫引本たるを憚るものゝ如し。其の出板は元祿六年にして畫引本の初出せる寛文四年よりは三十年の後に屬すれば、さる必要あるべしとも思はれぬものを。

各字に小篆を出して、右を楷躰、左を小篆と並べたり。夏川玄朴が説文解字を翻刻せしは寛文十年なれば其の影響かとも思はるれど、すべての文字に篆躰を附すること既に説文を尊重する態度に非ざるべし。

訓は畫引本に比して増減ともにあり、前本の訛の時に改められたるも見ゆ。

(36) 改正眞艸畫引大廣益和玉篇増補二行和玉篇

眞艸本にて畫引なるはこの一種ならんか。

龜田學士の和玉篇考に

半紙形、一本

内題 改正眞艸畫引大廣益和玉篇

目錄三葉、一畫より十七畫までにて部首の數は二百十 七行六段

本文十行五段 すべて百八十一枚 眞字を上、艸躰を其の下に、訓を又その下出す。本

文の初行には 大廣益眞艸和玉篇 と標せり。

卷尾に左の奥書あり

寶永四龍集丁亥陽春穀旦

書肆 田中庄兵衛壽梓

と有るもの。

この本の部首は全く字彙に據りたるが、或は已部の如く目錄にも本文にも佚したるもの、或

は二部の如く目錄には佚したれど本文には存するもの等ありて、部首數二百十となりて字彙よりも 七 を減ぜり。

この本の異本と思はるゝものに 増補二行和玉篇 といふものあり、本文はこの本と全く同じく、たゞ其の目錄を七行四段に換へ、部首の上の丁數を白字にせるを異とす。

(37) 篆字和玉篇綱目

寶永六年正月に江戸の萬屋清兵衛(二字推讀)と大阪の雁金屋庄兵衛と等の板行。第一枚の表に苗村丈伯の序あり。その裏には篆躰にて中央に 篆和玉篇綱目 楷體にて右に 校筆畫篇旁訂魯魚焉馬 左に 無一字紕繆、莫音訓參差 とあり。第二枚には 字畫辨義集 と標して、その目次として 分毫疑字 穎畫誤字 運筆 遵時 古今通用 を挙げ、次には前々項に述べたる小篆増字和玉篇綱目三卷をそのまゝに出し、卷尾にはいはゆる字畫辨義集を出せり。本文は十行十一段。

苗村氏の序文は元祿六年仲春の作。さきに節用集綱目を編撰し、今歳また此の書を成したれば羽翼成り輪輻湊れりと喜べり。寶永六年は元祿六年よりは十七年の後。この序も彼の小篆増字和玉篇綱目にこそふさはしきに、此に存するは字畫辨義集その後成りて著者會心の作たるにや。

(38) 和玉篇大成

見返しには中央に 引早和玉篇大成、右に 享保十乙巳 歳仲秋吉旦、左に 江戸書林(この下、空白)の三行あり。

次に部首目録あり、二畫に始まりて十畫まですべて百十二部。

本文の初行には 早引和玉篇大成 勝田祐義編集 と題して、部中は畫數順。第五十枚の表にて本文を終へて、その裏に 雜部引ヤウノ指南 を出して、引き惡き字を全畫數にて出すこと十枚半、その末に

享保五歲 庚子 孟春良辰 東都書肆 吉文字屋次郎兵衛板

とあり。之を見返しに對看すれば十年に此の五年のを再刻したるか。

又全書を通じて頭注ありて 字の本を記す分 相似てちがふ字の分 字意を記す分 一字を二様に書く分 字畫かきやうの指南 字を作る心を記す分 字音假名づかひの分 の七部に分ちて假名交り文に説明せるも親切なり。果して之に異本あり。近頃著者の獲たる者は

日本橋南壹町目

東都書肆

白松堂主萬屋清兵衛版(印)

とありて發行者同じからず。但、見返しの半葉を缺くを以て其處の異同を述べがたし。

(39) 倭 眞艸字引大成

見返しには 上に 文政三辰冬増補再刻 と横書し、下を三行に分ちて中央に 倭 眞草字引

大成、右に

正字、俗字、和字、詳辨、  
韻字、平仄、兩韻、悉載

千里必究、左に

平安書肆

中川文林堂藏

とあり。

半面七行八段、今二本に分てど丁附は通じて百七十六枚。首に凡例八條ありて倭字略字をも收めたる由を云へり。本文は艸躰を右にし楷躰を稍小さく其の左に書し、その下に訓を平假名にて出せるが、音は片假名を用ふ。

奥附には 寶永四丁亥年元版 文政三 庚辰十一月再刻 とあれば寶永四年本を増補せるかにも見ゆれど、本書の記せる寶永四年本は改正眞艸畫引大廣益和玉篇なりしが、同書は部中の文字を畫數によりて序でたるものにて、今この書の然らざるとは自ら異なり。抑々畫引は日を逐うて利用せられたるものなれば寶永四年に既に採用せし組織を文政三年に更に拋棄すべくもあらず、即ち本書の増補せられぬもの寶永四年に存したりけんも、其は改正眞艸畫引大廣益和玉篇とは別の書たりしなり。

本書は又明治六年に 改正増補眞艸早畫字引大成 と題して銅板横本としても大阪の文林堂中川藤四郎等より出版せられしことあり。その奥附には

眞艸二行和玉篇 片紙本

元板

眞艸字引大成 平紙本

二刻

同 文政三 庚辰十一月

三刻

同改正補懷用眞艸早字引大成 明治五 壬申春 銅鑄四刻發兌二行  
とあり。眞艸二行和玉篇とは寶永四年本の異本として本書に述べたるものなれば此の記載は其の書の奥附とは一致すれども、内容にてうち合はぬこと上に云へるが如し、但しこの四行の間に於て 和玉篇 の名の潜みゆくは確に時代をうつせるものならん。

(40) 頭書韻附四聲和訓畫引增益和玉篇

龜田學士の和玉篇考に

國語研究室に會て藏せられし者

六冊合せて二本とす、その枚數 卷一—32 卷二—33 卷三・四・五—各31 卷六—26 す  
べて百八十六枚

目錄は十一段 本文は七段 とともに八行

柱には 首書 和玉篇卷、 とあり 頭書もあり

刊行年月書肆名ともに未詳

とあるもの

(41) 草艸本行眞艸左行本

最近に著者も一本を得たり、横本五卷より成れるを合せて一本とす。慶安二年本と同型なれど内題の文字の白からぬ、目錄の部首を毎卷一より數へ直せる、本文九行四段にて一行少き

を異なりとす。又毎卷の部首の數は慶安二年本と同じけれども第一卷四十六枚第二卷四十三枚第三卷四十四枚第四卷四十五枚第五卷四十三枚この合計二百二十一枚にて彼の合計三百八十九枚(本章25を往看)の六割に過ぎざれば收むる文字は其の半數なるべし。中央に艸艸を大きく、左に楷艸を小さく、右に其の音を更に小さく、下に訓を出して、假字は悉く平假名なり。卷尾には年月なく、書林として京姊小路堀川東江入町中川茂兵衛 中川彌兵衛 を出せり。

さて此の書肆名の前に 新板袖珍字海和玉篇大成一卷出來 眞草袖珍字典和玉篇大成板行 珍袖四

聲玉韻略大成板行の三行あり。そも、字典の名あるもの謝啓昆の小學考には康熙字典の外には胡宗縉の字典發凡あるのみ。胡の書のいかなるかは謝氏述べざれども、之を正字通交誤の後、康熙五十九年の序ある六書通の前に序でたるを見れば或は同四十九年に成れる康熙字典に依るべき書たるに非ざるか。同じく胡宗縉の著せる同文聲形故に序して汪師韓は胡の晩年に之に遇ひたりと云へるが、汪は雍正の進士なれば胡の康熙の末に生存したるべきを想像せしむる一助ならざるか。乃ち字典の語は康熙字典以後に用ひられたりとすれば字典和玉篇大成の成らんは字典の吾が朝に傳はりし後ならざるべからず。字典の成れるは吾が寶永の末年なれど延享の末に歿せし太宰春臺は之を利用するに至らざりしに似たれば字典和玉篇大成の刊行を豫告せる本書は寛延より後に出版すべきなり。

寛永廿年に眞艸本(本章21)の出で、より新刊眞艸和玉篇(22)慶安二年本(25)同三年本(26)寛文

七年本(31)など次々に出でたれば、この本をも慶安中に出でたるかに推定する學者も有れど、著者の見る所のもの三刻若くは四刻本にて彼の字典和玉篇云々の文字が補刻せられたるに非ざる限然く年代を早むるを得ざらん。但し寛延以後に非増補本のなほ出でしには寛文七年本につきて述べし如き奇異の念を再びせるを得ざるなり。

以上四十餘種を述べたれども和玉篇と名づけられしものは更に多かりけん。倭玉眞艸字引

大成の奥附には 平安書肆中川藤四郎藏書元ノとして

|                             |    |                           |    |
|-----------------------------|----|---------------------------|----|
| <small>眞艸</small> 大廣益和玉篇半紙本 | 二冊 | 袖珍畫引和玉篇 <small>横本</small> | 一冊 |
|-----------------------------|----|---------------------------|----|

|         |    |         |   |
|---------|----|---------|---|
| 眞艸和玉篇大本 | 三冊 | 袖珍増益和玉篇 | " |
|---------|----|---------|---|

|                     |    |         |   |
|---------------------|----|---------|---|
| 同 <small>横本</small> | 五冊 | 字海和玉篇大成 | " |
|---------------------|----|---------|---|

|            |    |         |   |
|------------|----|---------|---|
| 同 新刻平かな附 同 | 一冊 | 字林和玉篇大成 | " |
|------------|----|---------|---|

袖珍四聲和玉韻略大成小本 "

の九種を、草艸本行眞艸左行本の奥附には

|                                |    |             |    |
|--------------------------------|----|-------------|----|
| <small>新板</small> 袖珍 字海和玉篇大成一卷 | 出來 | 袖珍 四聲和玉韻略大成 | 板行 |
|--------------------------------|----|-------------|----|

|                              |    |  |  |
|------------------------------|----|--|--|
| <small>眞艸</small> 袖珍 字典和玉篇大成 | 板行 |  |  |
|------------------------------|----|--|--|

の三種を載するなり。況や廣く諸家の書目を探れば必ずや僕を更ふとも數ふるに勝へざるべきをや。ひとへに一を掛けて百を漏し、譏をおそるゝのみ。